

涼しげな一幅

現在、大学文書館では、中谷吉郎が描いた南画に、湯川秀樹が自作の短歌を画賛として記した掛け軸を閲覧室に飾っています。北海道らしからぬ夏の猛暑、初秋の残暑の中、目に爽涼です。中谷に教えを受けた松本篤二氏（一九五二年北大理学部卒業）の旧蔵品を、ご子息の松本健郎名古屋大学教授からご寄贈いただきました。

中谷吉郎（一九〇〇〜六二年）は、一九三〇年の北大理学部創設時に着任し、人工雪の製作に世界で初めて成功したほか、低温科学に関する研究で多くの業績を上げた物理学

大学文書館へ
行こう

第25回
「中谷吉郎と
湯川秀樹のコラボ」

北海道大学大学文書館 井上 高聡

中谷吉郎の南画、湯川秀樹の画賛による作品

者です。学生時代に師事した寺田寅彦同様、随筆・絵画などにも優れ、「雪は天から送られた手紙である」という一文は有名です。

湯川秀樹（一九〇七〜八一年）は京都帝国大学を卒業後、阪大・京大で理論物理学を研究し、戦後、一九四九年に中間子理論によりノーベル物理学賞を受賞しました。学者一家に育ち、漢籍や書画の素養があり、短歌・俳句をよくし、優れた随筆も残しています。

文人科学者の交流

一九四〇年晩春、北大理学部が湯川を臨時講義に招きました。当時、湯川は「中間子理論」の研究により注目されて



中谷吉郎 (1940年代)

いました。このときの湯川の講義を受講した理学部一年目の学生は、「中間子理論は理解できなかつたが、分らないなりに感激した」といった意味の回想を残しています。ところが湯川はこのとき風邪をひき肺炎になって、医学部附属医院に一ヶ月入院をしました。退院後は静養が必要なため、夏の一ヶ月ほどを中谷家で過ごしています。中谷家を辞するとき湯川は、「病癒えて帰りに行く身や北国の人の情を 家苞(いえづと)にして」の歌を残し、中谷から受けた懇情を家苞(手土産)に持ち帰りました。

う、別にはたに迷惑にはならない道楽」と、お互いの仲を記しています。

中谷は大学卒業後に寺田の影響で油絵を描き始めましたが、ちよつどこのころ、やはり寺田が墨で描いた南画を入手して大層感心し、同じように南画を描くようになりました。中谷は随筆「南画を書く話」の中で、「趣味が枯れて来たなどという洒落た話ではなく、油絵は描き上げるのに一〇時間以上掛かるが、南画は一、二時間あれば仕上がる」と記し、時間のない中、「無理なやり繰りをして、妙な墨絵を描いているところを見ると、よほど道楽者に生れついているらしい」と自評しています。

一方、湯川の方は、随筆「中谷吉郎さんの絵と私の短歌」の中で、「中谷さんは絵が上手で、いつも紙、墨、ハンコなどを持ち歩いている。二人が会食すると、必ず、まず中谷さんが絵を描き、そして自分に讃をしる」と言う。仕方なく、歌が俳句をつくって、絵の中に入れる」と、少々迷惑気味です。しかし、「中谷さんは、どんなものでも絵の題材にされたが、型にとられない、なかなか味わいのある絵を描いた」と評しています。

湯川の北大再訪

一九四二年夏、一年前の臨時講義が中途半端に終わってしまったとして、律儀な湯川が再び北大を訪れ、講義を行いました。そのときの中谷と湯川、二人の文人科学者のコラボ作品が、冒頭に記した掛け軸です。中谷がキキョウなどの秋草をあしらった南画を描き、湯川が自作の短歌の画賛を書いています。

あかだもの
葉末ゆすりて 吹く風の
涼しき夏に またあへるかな

「あかだも」はエルムのこと。再び訪れた北大キャンパスのエルムの枝が涼風に揺れる夏の情景を歌っています。



1940年、学士院賞恩賜賞を受賞した際の湯川秀樹(右から2番目)